

恥骨部皮下に発生した嚢胞状リンパ管腫の1例

埼玉医科大学泌尿器科学教室（主任：岡田耕市教授）

沼 秀親, 荒木 重人, 岡田 耕市

A CASE OF CYSTIC LYMPHANGIOMA GROWN IN SUBCUTANEOUS TISSUE OF THE PUBES

Hidechika Numa, Shigeto Araki and Koichi Okada

From the Department of Urology, Saitama Medical School

A 37-year-old man visited our hospital with the chief complaint of a painless mass in subcutaneous tissue of the pubes. We extirpated the localized cyst 2.5×4 cm in size. Histological diagnosis was cystic lymphangioma without malignant findings.

We reviewed the literature on lymphangioma, a rare disease seldom seen in urological fields.
(Acta Urol. Jpn. 36: 957-958, 1990)

Key words: Cystic lymphangioma

緒 言

リンパ管腫は幼小児の頭頸部や上肢に発生する比較的稀な良性腫瘍である。泌尿器科の領域ではあまり経験されることがなく、ごく稀に後腹膜腔^{1,2)}や陰囊内³⁾および陰茎⁴⁾に発生した報告をみる。われわれは恥骨部皮下に発生した嚢胞状リンパ管腫の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：37歳，男性，教師

初診：1988年8月22日

主訴：下腹部の無痛性腫瘍

家族歴・既往歴：特記すべきことなし

現病歴：1988年8月初旬頃，偶然に下腹部の拇指頭大の無痛性腫瘍に気付くも放置していた。しかしその後徐々に増大してきたため当科を受診した。腫瘍は恥骨部皮下に限局し，2.5×4 cm 径の柔軟な楕円形を示し，穿刺を行ったところ淡黄色調の液体約 10 ml を吸引できた。その鏡検像では何等細胞成分を認めなかったもので経過観察を行っていたが，再度腫大したため，同年9月28日摘出目的で入院した。

入院時現症：体格中等大，栄養状態良好で胸腹部理学的所見に異常を認めず，また全身の表在性リンパ節は触知しなかった。腫瘍は柔らかく，周囲組織とは明瞭に区別でき可動性を示した（Fig. 1）。

入院時検査成績：血算，血液生化学および尿には異

常はなく，超音波検査では液体の貯留を示す嚢胞性病変を認めた。

以上の所見より孤立性の嚢腫を疑い，同年9月29日腰椎麻酔下で摘出術を行った。

手術所見：腫瘍は皮下に存在し，一部は皮下組織と癒着を認めたが剝離は容易であった。

摘出標本：3×5×3 cm，重量 5 g の多房性の嚢胞で内容液はうすい血性であったが，これは前回の穿刺によるものと考えられた。

病理組織学的所見：大小に拡張した薄い壁を持つ多くの嚢胞よりなり，内層は一層の内皮細胞で被覆されており，また一部に弁の存在が認められた。さらに内腔にはリンパ液の充満するものが散見され，悪性所見は認められず嚢胞状リンパ管腫と診断された（Fig. 2）。

術後経過は良好で同年10月4日退院した。退院後2週間目の外来受診時，陰茎冠状溝の背側部に軽度のリンパ管の拡張を認めたが，これは手術操作によるものと考えられ，その後の診察では消失した。

考 察

リンパ管腫は先天性のリンパ管奇形で^{5,6)}，胎生8週で発生したリンパ嚢に sequestration（分離）が生じ，求心性の排液が不十分な結果発生するといわれている⁷⁾。このリンパ嚢が存在する部位が好発部位で，頭頸部や上肢，後腹膜，臀部および下肢などがあげられる。本症は分類において混乱を生じているが，病因



Fig. 1. A solitary cystic mass is seen in the subcutaneous tissue of the pubes.

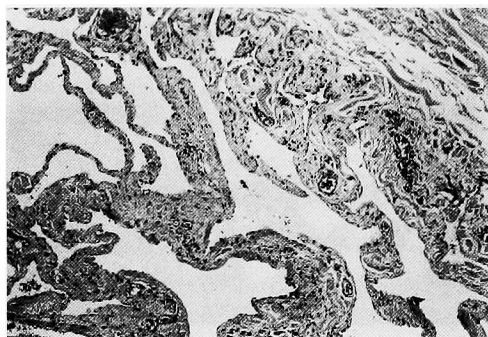


Fig. 2. Histological findings indicate cystic lymphangioma. (H.E. ×100)

や治療に差がない以上細分するのは無意味で、組織学的所見から、浅在性リンパ管腫と深在性リンパ管腫に分類するのが適当であるとされている⁸⁾。前者は単純性リンパ管腫とも呼ばれ、個々のリンパ管腫が小水疱として皮膚の表面に突出したもので、腫瘍的性格よりも母斑的なものである。後者は真皮ないし皮下にかけて存在するもので、海面状リンパ管腫あるいは自験例のような嚢胞状リンパ管腫が含まれる。組織学的には浅在性リンパ管腫は深在性リンパ管腫に比べ、乳頭層にくい込み、壁は固有膜、弁および筋細胞を含まないとされる。また外因などにより中枢部のリンパ管に通過障害がおこり、末梢のリンパ管が拡張したリンパ管拡張症とは概念的に区別すべきであるが、組織学的に鑑別は困難なことが多く、既往歴や現病歴を参考として判断する必要がある。

治療は外科的摘出が最良の方法であるが、摘出が不十分であると再発やリンパ液の漏出を生じるとされる。しかしいずれの報告例においても容易に摘出されており、経過も良好のようである。

自験例は既往に外的要因はなく、幼小児期にすでに存在したリンパ管腫が徐々に増大してきて、今回発症したものと考えられた。また本症は発生部位的に、正常リンパ管の分布密度とは必ずしも相関を認めていないので⁸⁾、恥骨部皮下での発生もありうると考えた。

結 語

37歳男性の恥骨部皮下に発生した嚢胞状リンパ管腫について報告した。本症は泌尿器科の領域ではあまり経験されることがなく、若干の文献的考察を行った。

文 献

- 1) 森本泰介, 粟津篤司, 田代久夫, 樽見隆雄, 大和俊夫, 中川正久, 井田 健, 中瀬 明, 曾田一也: 後腹膜原発嚢状リンパ管腫の1例と本邦報告例の検討. 日臨外会誌 44: 912-918, 1984
- 2) 古畑哲彦, 小川勝明, 植草富二郎, 平尾絃一: 腎リンパ管腫の1例. 日泌尿会誌 78: 149-152, 1987
- 3) 竹山政美, 高 栄哲, 近藤宣幸, 土井康裕, 松井孝之, 藤岡秀樹, 多田安温: 陰嚢内リンパ管腫の1例. 日泌尿会誌 79: 1258-1260, 1988
- 4) 竹山政美, 高 栄哲, 近藤宣幸, 土井康裕, 藤岡秀樹, 時実昌泰: 陰茎リンパ管腫の1例. 泌尿紀要 35: 523-525, 1989
- 5) Ninh TN and Ninh TX: Cystic hygroma in children: a report of 126 cases. J Pediatr Surg 9: 191-195, 1974
- 6) Singh S, Baboo ML and Pathak IC: Cystic lymphangioma in children: report of 32 cases including lesions at rare sites. Surgery 69: 947-951, 1971
- 7) Kanzaki S, Arata A, Suyama B, Ohmura T, Yamada K, Miyake M and Enomoto S: Urethral obstruction owing to retroperitoneal cystic lymphangioma. J Urol 138: 370-371, 1987
- 8) 大熊守也: 間葉系腫瘍, 神経腫瘍. 現代皮膚科学大系, 第10巻. 山村雄一, 久木田 淳, 佐野栄春, 清寺 眞編, pp. 79-91, 中山書店, 東京, 1980

(Received on November 1, 1989)
(Accepted on March 8, 1990)